梅児誉美

三編 中

48
へ 遶 13
839
8

特
門 へ 遠13
號 839
巻 8

春色梅児譽美巻の八

江戸　狂訓亭主人著

明治三六年十月十八日購求

第十五齣

住バ繁花の誇も今ハ鍼の並家都ハあらで雛人形乃姿ハ等しき美婦人の隣垣歩行も梅が香の傳ふ堤の春の風伴も呼ぐ向翁自由自在の釜の湯が風雅と洒落し茶會亭ふ何某隠居何の寮と槇木の垣根連ニ寺法の声ハ鶯の声うるハしき朔日ゑ朝湯が出来する紙白

慢といふもんし屁けぬ片折戸寄と立出給むその容色に完
爾と愛敬をこぼせし白き薄氷駒下駄をも田圃の三ヶ所も
高き左り褄も小梅あたりの名主の娘通ひ稽古の朝がへり
野なまじ鄙なれぬハ根下髷鴻田の当世風品やすき娘かの
づかしき江戸者の隅田川呑込しらる平伊輪の庭下駄を
く木場の藤兵衛幸富久寺の垣ねにて朝湯の出来まねを
江小言　芸「どうもこうちが無理だけれど朝ハ湯へ這入る給へ
うかべまがうたゝ給へ　つまでもつし　描川由次郎
由「モシどうでも湯も出来ず

質が一番よふござんすねへ　今朝ハおまへさんまそ湯にお眼が
さめましたね　芸「呑倒しましたけれど森ハいへ入し給へ
めの紙　時「湯へ出来ましたろう　由「モウ沸きましたろうその男
りまず女湯が湧給へごろうじろうコるくまると往眼縁の芸
者が箱やの手の浴衣を持して来ると今朝ハ化粧をするのも
去年で家へ帰りてのそれへおんぞといふて居てく膳へ流
し紙縫ひでくれくれ居ませうぜ給へきかお　芸「とかくのまを
夜名実をその芸者がおまへの白紙兄くまや由さんお母へも

由「そべハ此方へ何処にお出でなさる門さん門なりヨ梅し
い逆へと出かける法なりで内の湯を待てゐるありがたいお迎ひ哉
引出しや〳〵志まへう　由「十二つまつら極へ素人おまへそぞ女かの
ろけも幸まどめ　蓉「イヤあんがい桜川善孝の息子でぶくも
女ぎらひと云の雛人ハあるめへ　ト云ながらむきいやの湯ぶの
湯の前へ来るとりかゝり湯やの鏡を取りて見る気か
若気の粧湯むかうまでござる桜色年かさ一つ二十六七ざ門
とまる女ぞ美しき姿もうらくござる暫り結ばね巻の細帯て

拭ひ紙を口にくはへて小さき黄楊の櫛にて乱れ毛をなでるびん
のおくれ毛をかき上てふと蓉を見ると顔見合せば門くり
しく「ヲヤ蓉さん　蓉「ヲヤ門までござんしたのお蝶がらさく
久しくあはなんだ見違へるやうに大きくなつたそうくマア
何処に居るのでヱト　さりとぶりで蓉が名を出すも其の声も門のめ
ゑくさゑを由ぞうに蓉が名がせるの紙さき
由「他のことより我身の落度サく言分ハなんとござへト小声
蓉「由べこの近所でも上宿の　蝶「イエ小梅の姉さん
がよくつくこの横町の家へ来て居まする甚処へ集めて

戸をしめてヨト立どまりて暫しの中桜川由次郎をはじめと
連人湯に這入りまづそつかりと見まはし〽由「旦那連人よね
つくねんと見やりてゼト笑ひながら湯屋の障子をわけま
ぬ芝居の海老さんゆゑぐわらりとまづまで倒るを構はず
内から飛出す小童〽小「こちやゆきますやおやね〽由「きざ
に拵へるやツサトおひながら着物ぬぎ捨て出格子へ通流し
をみんなは板の間に脱ぎして井戸がへの如く通例より歩き
濁桶に着ひろげの櫛袋をかけ紅梅の小枝がいきなくわるき

風呂の中にぬる小児のいつかうあるべき吾妻〽由「閑舎く
前あつらへ風流子江戸の湯屋に入る絶えくあるまじ〽由「こりやア
まあと入り遠くぬる之ト笑ひながら湯に這入る折から妻むすめの
姫様子より其外芳清い妹となども出で横町から部門より
出合ふて連れ立ちこともなげにふたりともおそろしく〽孫「ヨヤく能所で逢ふ
今日もなんでも足をそろへてさアく一同に偽つく
妹「ヨヤ母出かけなかつたしこ〽孫「ナニびつくりしたあきぐれいコレ
能ゆぐんに高座にしろ姉様で二三日間とお居

おさへお門とも座敷の日割勘定見番掛りの屋敷より
降かけても寄る継へ金コウ云ふ者と三歩で十日の余分を払ふ
ちまちまくつもるものゝ今日で幾日ぞとまたぞよとやした医者
どの へ 茶屋より小路の保里の内へお張出せ付紙つてゞ渋ふやつての
と延引て三かど止留させるやう甚方の勝負へもあるなが
此方の腹が目がしれたるアサアく直ぐに連て帰るト言ひ
悪婆が転見ず嫁ぬかしるよそも寄せんてお行く 蝶「大きに延引 なりまして看病
せる伯母さんが両三日の中に来るよて門ぐろぐつぞかされ中を

母「イヤモウ継へ途方も無へト 葭「コウおかみさん、へ
しいてはへ知る継へがこの子へ子どものこどころ姉にとゆくに
掛合て連て行かきつくてつとよろうじやア継へか 母「ハイ左様へ
さんへ 葭「見て居ましてる知る継へが唐琴屋の二階じやアゆくアア
人へ不知まして葭多東紋日物日も相應にして為て。コウ此末
が座敷では随分かしぎこを沢山させ 母「かんよわるて大本
嶋の旦那 葭「お其様旦那といふよりへお蝶へ其々自の元主
人そま様さんでろぼぎてるく子どもとおの門て経しからち

あんまり冥利（めうり）がよくハあるめへトいひまくしかけゐるお峯婆（なぐ）
峯「モシ　ほんにひるまで見（み）えなかつたが紙屑（ころ）もなく藤兵衛（とうべゑ）さまにむかひ
お前（まへ）さんハその子（こ）の世話（せわ）ぐるもなさる事で御縁切（ごゑんせう）になりし子
の子元（もと）よりもとくも今（いま）じやアふびんに得心（とくしん）づくく表向（おもてむき）ハ
親子（おやこ）まするの時（とき）ハ抱（かゝへ）の奉公人（ほうこうにん）あつても一切（いつさい）かまいなしまろ
ういくら手（て）どりの渡（わた）し二十両（りやう）喰雑用（くひざうよう）かゝり元利（ぐわんり）の金（かね）が
すりかりそろつく返（けへ）す證文（しやうもん）をわけやしやうかこれ皆（みな）
いやらしく密男（まおとこ）があるから御勘弁（ごんべん）のならぬト箸（はし）をも手（て）にもちぐる

一言（いちごん）にいへバそれやまアごもつともじやけれど奇妙（きめう）の寛活富（かんくわつぶげん）
仁者（じん）そも藤兵衛（とうべゑ）が今（いま）さらに途中（とちう）で出合（であひ）しは
藤「コウお峯まアやさしい門口（かど）コリヤ悪いぞなぜ引取（ひきとつ）て婆（ばゞ）さんやりての婆の
母（はゝ）にまゐりましたちやア男（をとこ）がたゝねへトいふのハやぶれかぶれの
実（じつ）ハお峯（みね）が可愛（かあい）そうに気にも掛（のりか）けて母じやア縁（えん）がかやひの縁を
ひきとめて次（すき）にも紙付（つけ）てやらうコウ母は今（いま）見（み）ハマアお帳紙
お峯に預（あづ）けなさいトいふところへ今日良縁（ひつい）倫の女房をかちまの藤兵衛がむかひとしとめ　女「ヲヤかみさま
湯よりかへつて女ハやせねら　藤「ヲイおかへりござりやアお世話（せわ）イヤ調度（てうど）

ト気の毒ト　女の耳に口をよせてささやけば女ハうなづき出て行く　蝶「菊さんまでそこにお客の

毒でござりやすヨト　めづらしく湯へ入る積り川が指を紙のぞき　由「旦那にさへとハモウ

あがりやせぬゼ　菊「ヨイ由孝ナツト両側があてこが出来るくらゐでマア

おらア湯ハ後にしやうヨト　いひながらひとへのぜんの女が手に包みし紙　菊がまへにおきてわざとさびしがる

めおとにすりやア　菊「サア此ずきおれが仲人にたのみくやるから二三日までで

日延をたのむト　[illegible]　菊「イエナニ是ハどうやうあるまい

お客の毒どナニ己しでも理さへあれバ何もそうやら

おしくいふ気ハおざりませんが　菊「ト[illegible]いづまも[illegible]もおれが

呑込でゐるから両方の為にならねへト　お菊がいへバおひきさいひお蝶

ぎたゞうへば　蝶「おまへにマアひよんなことでお客の毒か。どうぞ幽堪忍

して下さい　菊「お前に済ねへ程へおやまる事も程へさぞかし気味

もわるからうが此方が気じやアお阿めへ此家にでも間をつけさ

お前の[illegible]じやア程へ何でも元主人の娘の[illegible]

をあんまりこあしさ仕方どうう持めへの癪にさうらくいゝぐる

世話やく気になつてがマアどうしさ理合で今の身となつて

のごへト○同じくお蝶ハ涙ながら此草紙の初編二編に[illegible]

せしでさへ身の上をくはしくきかせバ元来富福の寛活ひろ
ね気性の男達小梅のお由が仁侠の噂は疾さら捨ても置ず同
気の合しも縁の糸引と知らねど蔦をばかり 蔦「そりやアマア
そんな苦労する身のうへで可哀そうにおもつて業ト遊へがて
これ
是からおまへが姉御になつてやらう婆さんが方をも離て安心
トいひつゝ酒さる 蔦「コウお飯をはやく持て来ねへ汁ハいつでも汁ハ子に
盃を持きたる
まあお飯の方がよからうトきニ由太郎ハどうしやう 女「牛の御膳
こちらの所に 蔦「そうするがいゝだらうハアコウあく気がつくぞそ

住めりぐらゐならはやく呼んでくんナ 女「ハイ〳〵ト勝手へ行く 女「お膳を
いたしませう 蔦「ナニ〳〵めへたちが先にお飯をはやく喰てしまへ
私が姉さんが業ドて居るだらう 縁「イエナニ上寿寺の和
和尚さまへ直に参つて帰る律のりふそう言てきまさ
ぬう 蔦「ナニ銅湯から婦多りへ直ゆう 縁「イエナニ去んでの
アノお屋敷の隣の 蔦「ウヽやつぱり小梅の瓦を焼く手前の
あゝそれでも余程ある娘「三町ばかりありやすが謝
らにで大家へ隣家へ行ぐらゐに思つて居りやすヨ　この時縁女は由次郎がもする

斯く是よりやゝ暫らく酒宴ありて後　由「扨此今日は少
しの中おひまを戴いてもよろしうございませうか　菊「今で何せ
何所ぞ約束があるのか　由「イエ鯉丈と茶利屋と私と一座に
なる相談がございますから一寸中の里八がやくそくをして
おいた　菊「ハアそれならてうどいゝ私も屋敷の御用
があるから今日は一日まぎれになるからモウいゝから直に行ねへ
由「イエマア御酒がすぎるならでもよろしう　菊「ナニおまへもモウ家
を出るからはよそのものより一寸ひとことおことわりやせうから

向島の宗匠は濱の宿の川崎へ言傳をしてくんねへナ　由「アイ
延津賀さんの所へござりやすか　菊「さうサく兎に角男
圖遠ひがく来るからそしての宮戸川のお咄もするから
ぶらぶら寄って一所にさそって川崎へ私で来て守りや
とあつらへんか　由「ヘイかしこまりやしたそんならお免を蒙
く歎なりホイヤ姉さん御ゆるりと　ト　菊「夢が此位まで[illegible]
早し　菊「コウく悪推をなさるなと濱の宿へ寄るくらんかよ
土手から向島へまはりて渡りやしてぶらツイ　失念をしとお嬢を

宗門ちやうどよいぜ　田「ナニ浅草から迄で銭出してもらひましたが　その
御用ばかりで乗切中流の渡しイヱ向島も自由自由に
なりましたこの渡し舟が今じや六人で舟をくぐりて渡し
ましやう　蒼「今しく寛の船人の数までは知らず
それで昨今中まで竹屋を呼ぶに声を枯らしてさんざつけ呼ばれど
呼ぶ船人は売って白毛会が欲にも〇文字会所の当時のよまひ人
須田堤主浅く呼ど此雪なりし万守が呼ぶ
寝た竹屋の音さへするめたり

蒼「その哥も今としてはありふれ出芽母残すよび
て堀へ乗切し頃の風情を語りと前書が長くとなる
なりやとイヤ三六もやり出舟のあとをいふ宗門サ　由「
跡も今日はよしにしようか　蒼「なぜく　由「どうし跡の幕が
きき喜に向かふ浅草をうきまするところもち持に　蒼「高い夜銭は
ハヤそれと早く紀逢へ　由「さぞお前が思ひきるくへイ御祝儀
よろうトもち出る木戸へ出てたの木戸の口内へ入るのは男女「ヘイ御機嫌
よふござりへイさあかへりやおやゝ由さんおかへりのおつ旦那

お跡からこ　由「そうかよ　女「どうりで此ごろけにお急ござる
つく　由「旦那殿しくあまを置ころう　女「ヨヤサア
わきこまそて　由「うちのおふくろう　女「蒼さん与田さんがあん
かるの此戸中まそて　トあべこべ方へいつつけるまゝ　時まさに春正月十日あまりとし
こともなく。南枝やうやくほころぶる梅暦のころに亀戸
福寿とし巳の時の鐘ボウてく〳〵引　瓦焼烟霞と倶に
うすく消るなど今戸に河岸場の材木の木遣音風のまに〳〵つたへ
て遠に宮使者あるの貝の音ブウ引〳〵

第十六齣

さても小梅の里に住し於由を久しく病床で洲崎の
邑の伯母ありし寡婦の宅を仮住居家主の伯母と古
郷の本家に拠なき用ありて此程家におらざれバ留主
居ぞするの出養生今ハ少しく病の怠りしも気つまり
鼓の音ぐさむ藝の物の本開く両戸に春の日の開和
あるハ浮ふつゝ障子の梅の樽に身を任せ女のこゝろ
を思ひ出しくづくと心もとなく鶯の音達八金龍山の

己の時らく耕地を通る商人の声 辻売「白酒く　引
幸よりかん〳〵。本精にひゞきて遠にきこゆる折こそ
あれお蝶ハ木場の藤兵衛に打連立て竹垣の開き戸
明く 蝶「姉さん幸色を何とも言わず帰りがけもより
おそく門をたゝく子トいつて這入中戸口藤兵衛にむかひ
蝶「マアこく〳〵おかよりかすいくらいでござりましたトいひながら奥へ
行かうに藤兵衛が訳泥らしくまして けれバ 由「フウム
そうかへそれハマア御信切にあがりいてどうもこちらへ

お通しやか 妹「ハイトお蝶ハなましげに次の間へ立出
蝶「藤さんどうぞこちら〳〵お出なさいまして 藤「よし〳〵お筆箱
の悪いに 由「イエナニ今日ハモウお夫にもよろしうございます
御遠慮なさいますんでどうぞこちら〳〵と取乱しまして失礼
からお出迎ひ申ませんコウお蝶がうやうやしくマア
お茶の支度でもおしヨ 藤「イエ〳〵おかまひなさいますな
トあまり門しがつてお由が座敷 藤「御免なさいト座に
つけバやがてこちら〳〵と上の座へちやく〳〵ぶひに顔見合

とはいぶりしき風情ありしがお由は御殿勤め常
の人卑下深からず　由〽わたしハ七年以前佐
倉の家中の槌屋の宅子武田出入りの出酒屋で　菊〽わたしハ
そうぞうけ降込まして奥二階酒の相手と終んざ
せつく新造への雅義と言つく　由〽わたしはその時あなたさ
まへ何事も御ぞんじあつて一と張外面如菩薩の押掛嬉
さんのまゝあい藝者と云ぶ身でさても恥かしく思ふ
のはさくしい浮名張立てまことに面目もなくしまでございます

せうとお侘致しこれが縁と言つて　菊〽あつかましいことと
言つゞけながらまんざら素行の身でもなし縫おぼしめすい
當座情　由〽江戸で逢つたをあつし芳町で致樂しさの
してその後はつざこと夢随の縁今も心の中で思ひつゞけ
いと知りつゝ旅から帰るより三味線捨て結ひつけぬ女
髪結となつてこの人様へ一寸逢さんと逢ふ時浮為に活
業いつしかまたね男の機嫌取つてとりつくろふも仕
まいとは自惚て採るやうぞお推量なされまし

ござりませんと纏はりつくお由が風情思ひ余つて、
遠慮する涙の眼元言葉さへ出かねていふにいはれぬ
情の色香[illegible]粋が狂ひ初めし心に蕾も花の恋
アア夢を見るやうな心もちで佐倉で逢つたその時に
よしやお前が四十九の年で厄年じやろと盛田さまへ縁
請ふ引路次親子連の旅路とはやくようしの爺
情の風に咲流されてこすまひしと思ひの外な芸
も芸も立流な座敷の手もしトいひまぎらかしおよし

まつたりもいひまぎらしそうらふに 曲「アトマアあくらしい七
年後もその調子の嬉しがらせ真にうけて今日
まで尽くし心の操有つて迷惑と思ひなさるか
どうぞかんにんしてくだんせお見捨てなさるなヨト いふ声のをりを翻え
二人に寄しる お由に似合ねその風情これぞ世の中の女の情に
さよ強もかしきも強きも弱きもこれぞとさであるてふ
あしその逢方の男志でこそ年若くても年増
年の若いにある かり年増あるくらいしるがつらしき 年増

遊女もとかく色男を見るよ、その時々のうつり氣
まゝ世にありあの評判も吐著と律義のうるさき
また男女の情をあらはしとつぐべし彼「十二塩患しか
とふ此方でいつもと威用かう帰ると直に間もなく大和
めぐりに友達が行とゆへより好の居無親ぶりでわる
やうすもし我経遠知のあきらけ癖因氣ありて友達の
浮落達中の長旅に阿房をして伊勢参宮京
の女郎で長崎の帰も京嵯峨も見物あそぶとうり西国

あるときの月と日に江戸で大変の親父の病死為る
主中出入の御屋敷と五軒までもあくじりが出来て
出替止そこまも知らずに道中銭拵ちりし其の跡
も借銭くぐ其さまらね金の五両に為と中生出入の
御坐の宿老へ十両二十両と無心の借も十七八俵それまで
残らず江戸へ知れ金を遣ひちらして拵ぶもいくが百里
二百里遠所に居て親どもを路銭も見かへらず不孝と
いふがあるものか親父の死んだに葬式の借金も其まゝ捨

平兼盛
我宿の梅のたち枝や見えつらん
思ひの外に君がきませる
小梅の於由
千葉の藤兵衛

置と世帯をもたせて不勝手一伯母へ無心といふ
も元伯母との六敷付の娘で母の姉義理ある中
の話しけれど内証があるとも知らず揚て繕ておく江
戸入のその日に直に内ゝ勤当させられ上総の親
類へ預けられ居る時分あまへのことを折ゝは思ひ
出しても仕方なし そのまゝにてやうやく二年程過て
宅へ帰りしところがあまへの事が気に懸りていろく
さがして見たけれど少しもしれずさが

実に困りはてる只今門を 由「どうぞして知りた
いものであり升しかし縁へわかりて佐倉宿で小児へ
行て東の方を廻して江戸へ帰るといふ文親がお出まし
きつとこれにて宅へ帰りてそれとはしれずて気がせいてその
かうとこしが風邪をひいて寝ておるといふ文親が赤坂より
しらせに六七十日過て宅へ帰りて聞けばおまへさん
の事もとより浮世の定めとしても どうしてもさがしたう
ござりまして宅の中をさがしてもおまへさんも亡くなし伯母の

世話ぐやかしくして居ても藝者や何かで
ねへ時も第一おまへさんにおかれなさる時も有る
せうに思ふ所でいつもつれて衣裳相手の髪結ふにも
うらやましけれど女の身で男の世話ホトいふものハ難儀ハ
業ぢやあらへきまり 妹「姉さんエお菓子が出来ました
しおらしい子お菓子が 由「ほんにおいしい何もおいしい 妹「ソレ
もの物でもねへ持つてやりなせへ 由「アイさんおいしいぞ
ソレ行くおまへさんの秋葉さんの裏門代ゆけバ

むかふの横手紙真直ぐに行くと近いそうだよ 妹「アイ
此間もそう通つて行きましたヨどちらへ紙買ひにまゐ
りや子 菱「ナニ今さしハモウおかゆひ母さんがされり
爰 今におくつなら何か持つて来るそうで 由「ヨヤそうでお
さいまゐりますマアアト 花「お蛸ぐらいかやく行てお出
よ 妹「アイ今まゐる洲崎へ参りますヨ 由「そんなら子 西
方とも寒く来てよヨお祖師さまへもおまゐりから
トいつて衰きてまさし出て行たあとを門さきで見るゐの

中へ當り合ふ色の見えけりと知られたり○ちよ川とはこの川

新製 すみだ川名物 みやこどり
折詰 笹詰 試入御土産 御好次第

極製 道明寺 富ぼたん
向島寺島新田 松花園精製
折詰重詰 御進物御好次第

二品とも上品の御菓子
當時向じまの名物なり

この作者が知己の家に此艶書をつゞる折から四季の
遊びの向島より四里へせの家土産にと桜餅よりすゝむるか
かまさりて実に極品精製の此口取なりとまでいさゝかあきゝ

艶気なくとお由までも新見合ほどもちぶさこその
中にお由へ嬉しきとやらさかりしさに綴そえさいひ
そゝくまこと身の上の貞も操も七年余り証拠なれば
今さらにさわし流石の寛二人が二の座の境へ
そもいろさんそのよしへ八十七回以上までて知るべし

春色梅児誉美八の巻了

婦女八賢傳　袋入　全十二冊

狂訓亭為永春水作
香蝶樓歌川國貞画

楽焼の櫛の政子形
黄楊の小櫛の操形
當世娘身持扇

為永春水作
柳川重信画

この草紙ハ當年第一の奇作にて例の為永がおかげ
やりの筆にあらでまだゆく形ぞも丹誠の佳本なり
もとめ御高覧の程偏ニ奉希上ゝ
物の本の問丸　文永堂主人　伏稟